授業談話データベースによる実態調査

—授業の発話の丁寧度について—

小林 美恵子

1. はじめに

本稿では、実際の授業の録音を文字化した資料に基づいて、教師の授業談話の実態をあきらかにし、その特徴を記述する。2007年度日本学術振興会科研費補助金の助成を受け、現在筆者がデータベース化および分析に取り組んでいる調査・研究「教師のストラテジー—授業言語のデータベース化及び分析」の一部として報告するものである。このデータベース化は未だ整備の途上であり、本稿は中間報告ということになるが、前半でこの調査の概要を述べ、後半では現在までに整った基本的なデータによって授業談話の実態を概観する。

2. 調査の概要

2.1 調査の時期と対象

調査データ収集のための録音は2006年10月～11月、および2007年5月～6月にかけて首都圏の高校を中心に行った。調査協力者として、筆者の直接・間接的な知人百名余りに依頼し、その中から承諾をいただいた20代から60代までの15校のべ30名の先生方にデータを提供してもらった。30名の内訳は女性14名、男性16名。20代4名（女2、男2）30代7名（女3、男4）40代8名（女4、男4）50代10名（女5、男5）60代1名（定年退職後再雇用された60歳の男性）である。若年者が比較的少なく、教科的にも国語科が30名中12名と、やや偏りがあるが、一応、国・社・数・理・英・芸術・家庭科と、なるべく多くの教科にわたるようにした。学校の種類についても普通科のほかには総合科、専門課程、定時制、通信制等さまざまな課程にわたっている。協力者のほとんどは都立高校、県立高校の教員であるが、都内区立中学、私

立男子高校の教員も1名ずつ含まれている。またこれらの学校のうち1校のみが男子校で、他はすべて共学校である。ただし、共学校の男女比率は多様で、授業クラスの男女比も多様である。さらに、さまざまな選択クラス、到達度別クラスなどを設置している学校の現状を反映して、授業が行われたクラスの生徒数も2名から44名と幅があり、男子のみ、女子のみというクラスもそれぞれ存在する。

なお、50代女性1名については学校・授業科目を変えて3回にわたって録音した。(表1 [153] [154] [155]) これは、「個性」を排除して、それ以外の条件が発話にどのように影響するかを見られるようにと考えたからである。この録音に際しては間隔をあけて、前回の録音の影響などが最小限になるようにした。

2.2 調査の方法

協力者自身が選んだ授業を、自身で小型録音機器を用いて授業の始まりから終わりまで、教授内容に関係のない雑談や、無言の部分も含めて、続けて録音してもらった。机間巡視を行ったり、10分程度の小テストを含んだり、実験をしながらの解説などを含む場合はあるが、基本的に講義中心の授業を調査対象とすることとし、1単位の授業時間すべてを使ったテストや、実習授業などはさけるように依頼した。1単位時間は定時制高校1校が40分と設定しているほかは45分ないし50分であるが、実際の録音時間については40分から51分30秒と差が見られる。平均は46分53秒14で、設定された1単位の授業時間の平均(47分)とほぼ一致している。録音時間の総計は1406分37秒であった。詳細については後出の表1に掲げる。

なお、録音しているということについて生徒に告知するかどうかの判断は協力者に任せた。実際にこのことを話題にしている授業もあるが、授業に含まれる教授内容以外の様々な付随的な話題の一つとして考えられるであろう。

録音資料と合わせ、協力者には授業をした学校やクラス、教科・科目の情報、協力者自身の性別・年代・教職経験年数をアンケート形式で聞いた。以上の基礎的なデータおよび次の2.3で言及するデータを表1にまとめる。

表1. 協力者の属性と授業クラスおよび発話レコード数

協力者					学校 課程	授業クラス				授業時間		レコード数		
コード	性別	年代	教職経 験年数	教科		学 年	男	女	合 計	単 位	実時間	全	教師	教師発話/ 全発話%
121	女	20	1~5	現文	定時制	2	4	5	9	45	47:20:00	774	535	69.12
122	女	20	1~5	家庭	工業科	3	28	0	28	50	45:21:00	396	305	77.02
131	女	30	6~15	現文	総合科	3	14	26	40	50	44:32:00	520	426	81.92
132	女	30	6~15	現文	国際科	3	1	23	24	45	45:28:00	402	317	78.86
133	女	30	6~15	現文	国際科	1	5	32	37	45	42:45:00	416	289	69.47
141	女	40	16~25	英語	総合科	3	7	13	20	50	48:56:00	981	806	82.16
142	女	40	16~25	現社	国際科	2	1	18	19	45	45:37:00	611	395	64.65
143	女	40	16~25	生物	通信制	0	25	20	45	45	47:00:00	448	431	96.205
144	女	40	6~15	世史	国際科	3	4	21	25	45	45:15:00	538	439	81.60
151	女	50	6~15	現文	国際科	1	5	28	33	45	45:55:00	494	394	79.76
152	女	50	26~	現文	普通科	2	8	22	30	45	45:15:00	292	270	92.47
153	女	50	26~	現文	工業科	3	13	1	14	50	50:07:00	701	577	82.31
154	女	50	26~	古文	国際科	1	5	30	35	45	45:20:00	777	620	79.79
155	女	50	26~	現文	国際科	2	5	30	35	45	44:09:00	562	323	57.47
221	男	20	6~15	英語	国際科	2	2	0	2	45	47:45:00	755	540	71.52
222	男	20	1~5	英語	総合科	2	6	12	18	50	47:53:00	1153	634	54.99
231	男	30	1~5	現文	通信制	0	2	4	6	45	44:30:00	323	311	96.29
232	男	30	6~15	数学	工業科	3	5	3	8	50	50:00:00	604	473	78.31
233	男	30	6~15	英語	国際科	2	0	15	15	45	45:55:00	975	681	69.85
234	男	30	6~15	数学	私普通科	1	44	0	44	50	48:56:00	547	439	80.26
241	男	40	16~25	世史	国際科	2	5	30	35	45	45:31:00	525	466	88.76
242	男	40	16~25	音楽	普通科	2	16	8	24	50	51:11:00	837	711	84.95
243	男	40	0~5	工科	工業科	3	4	19	23	50	51:30:00	488	412	84.43
244	男	40	16~25	英語	総合科	1	7	25	32	50	50:18:00	730	584	80.00
251	男	50	26~	物理	普通科	2	17	0	17	50	49:31:00	733	510	69.58
252	男	50	26~	化学	普通科	1	20	20	40	50	46:54:00	373	371	99.46
253	男	50	26~	日史	工業科	2	31	0	31	50	45:00:00	664	531	79.97
254	男	50	26~	数学	定時制	4	7	2	9	40	40:00:00	392	370	94.39
255	男	50	26~	現文	中学校	2	15	14	29	50	48:30:00	567	362	63.84
261	男	60	26~	漢文	普通科	2	22	20	42	50	50:13:00	951	715	75.18
平均										47	46:53:14	618	475	78.82

* 協力者コードは左より1桁目=1女・2男、2桁目=年代の数字(ex. 20代=2)、3桁目=各年代・性別中での通し番号となっている。

* 教科名については現代文→現分、現代社会→現社、世界史→世史、日本史→日史、デザイン史→工科と、それぞれ→の語に略した。

* 学年における0は単位制で、ある特定の学年のクラスではないことを示す。

2.3 資料の処理

得られた録音資料は文字化し、さらに分析のためにエクセルを使ってデータベース化した。一般的な談話のデータベースにおいては、発話の交代を区切りとして1レコード(=1行)とするのが普通である。授業の談話においても教師と生徒、あるいは生徒どうしで交互に発話が行われ話者が交代していく場合もあり、これに従ってレコードの認定を行ったが、同時に授業という談話形式の特徴として、教師がある程度まとまった発話を続けて行く場合も多い。その場合のレコードの認定については文法上の文を1レコードとし、発話の進行に従ってレコードを積み重ねた。具体的に言えば、(1)意味のまとまりがある(2)ポーズがある(3)他者のさえぎりが無いことをもって発話の1単位とする。この方法はかつて筆者も参加して完成したデータベース『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』(1997・2002 以下『男・職』『女・職』と略す)の方法に準ずるものである。なお文字化の際の表記の原則についても概ね同資料に従っている。

このようにして得られた発話データは総計18,530レコードであり、そのうち教師によるものが14,224レコード、全発話の76.76%にあたる(協力者ごとの%の平均は78.68%になっている)。1授業あたりの発話データ数の平均は618で、同じく平均分数46分53秒(2813秒)をこれで割ると、およそ4.55秒ごとに1発話がなされていることになる。教師1人あたりの発話レコード数(平均)は474だが、実際には協力者によって715レコードから270レコードまでの差がある。レコード数が多いものについては比較的短い発話を多く積み重ねて授業を構成していると想像されるが、少ないものについては、一発話が長いためにレコード数が少ないのか、発話量自体が少ないのかは数字の上からだけでは判断できない。この点についてはひらがな変換により音節数を明らかにするなどのデータ処理によって実際の発話量を特定していくことが可能であろうし、今後の課題ではあるが、現在のところは未処理である。

3. 授業の言語の実態

3.1 発話の丁寧度

授業の主たる調子を決めていくものの一つとして、発話のおもに文末の丁寧度がどうかということがある。「です」「ます」で終わる、いわゆる丁寧体の文は上位者として情報伝達する教師の折り目正しい態度を示し、このことが情報内容の重要さや品格を示威することにもなるが、いっぽうでよそよそしさや抑圧的な態度の表象となることもある。反対に「です」「ます」を用いず、「だ」や体言言い切りなどの形で発話が進行していく場合、生徒との関係によって、これは情報伝達に効果的な親しみの表出（ポジティブ・ポライトネス）でもあり得るが、ぞんざい、荒々しさなどの表出した支配的な発話となることもある。授業の談話では教師は一定の情報を生徒に伝える役割を担う。ここでは、情報を伝えること（レポート・トーク）が重要であって、会話によって互いが共感を持ち合うこと（ラポート・トーク）は目的とはならない。とはいえ、互いの共感が情報の理解を容易にすることも事実であるから、授業の主宰者たる教師は、さまざまな文体、丁寧度を持つ発話を組み合わせ発している。それは、たとえば「です」「ます」・「だ」体言などの言い切りに終助詞「ね」「よね」などを加え語調を緩和し、同意を求める形式にする、「でしょう」「ましよう」など語りかける形式を用いる、丁寧体命令形「なさい」の代わりに「ください」「いただけますか」などの依頼形によって指示をする、断定を回避し疑問形を用いるなどである。いっぽうで、もちろんこのような「緩和」を用いず、生の形で「です」「ます」、あるいは「だ」や命令形などを用いて情報の重要さを強調したり、話者としての教師の感情表現をあらわにすることにより情報伝達に供するということもあるだろう。

表2では、このような教師のストラテジーとしての丁寧体・普通体の使用のありようを、文末に合わせ文中表現も含め整理し、発話に占める丁寧体を含む表現の割合を少ないものから順に並べてみた。このように並べることで、丁寧度とその授業の持つ他の属性（教師・生徒・教科などの状況）との関連が見えやすくなると考えたのである。表中の用語、文末丁寧体とは倒置文を含む「です」「ます」および「でしょう」「ましよう」「でした」「まし

た)「ください」「なさい」などの丁寧体およびそれに「ね」「よ」などの終助詞がついた形で終わるもの。文中丁寧体とはそれらを文中に含むが、文末は普通体もしくは普通体に終助詞がついて終わるものである。なお授業の発話には、「ございます」は見られなかった。

表2. 文中および文末における丁寧体の割合

協力者	性	年代	学科 課程	男	女	教師 発話	普通体	文中 丁寧体	文中丁寧体/ 教師発話%	文末 丁寧体	文末丁寧体/ 教師発話%	丁寧体 合計	丁寧体/教 師発話 %
234	男	30	普通科	44	0	439	396	11	2.51	32	7.29	43	9.80
221	男	20	国際科	2	0	540	483	20	3.70	37	6.85	57	10.56
254	男	50	定時制	7	2	370	329	2	0.54	39	10.54	41	11.08
242	男	40	普通科	16	8	711	624	4	0.56	83	11.67	87	12.24
232	男	30	工業科	5	3	473	396	6	1.27	71	15.01	77	16.28
243	男	40	工業科	4	19	412	340	2	0.49	70	16.99	72	17.48
153	女	50	工業科	13	1	577	458	9	1.56	110	19.06	119	20.62
122	女	20	工業科	28	0	305	226	7	2.30	72	23.61	79	25.90
141	女	40	総合科	7	13	806	585	5	0.62	216	26.80	221	27.42
222	男	20	総合科	6	12	634	460	19	3.00	155	24.45	174	27.44
261	男	60	普通科	22	20	715	510	14	1.96	191	26.71	205	28.67
241	男	40	国際科	5	30	466	331	16	3.43	119	25.54	135	28.97
251	男	50	普通科	17	0	510	362	9	1.76	139	27.25	148	29.02
132	女	30	国際科	1	23	317	222	5	1.58	90	28.39	95	29.97
121	女	20	定時制	4	5	535	373	6	1.12	156	29.16	162	30.28
233	男	30	国際科	0	15	681	467	13	1.91	201	29.52	214	31.42
253	男	50	工業科	31	0	531	358	8	1.51	165	31.07	173	32.58
155	女	50	国際科	5	30	323	217	14	4.33	92	28.48	106	32.82
154	女	50	国際科	5	30	620	396	29	4.68	195	31.45	224	36.13
133	女	30	国際科	5	32	289	180	4	1.38	105	36.33	109	37.72
131	女	30	総合科	14	26	426	265	22	5.16	139	32.63	161	37.79
151	女	50	国際科	5	28	394	241	16	4.06	137	34.77	153	38.83
142	女	40	国際科	1	18	395	211	13	3.29	171	43.29	184	46.58
252	男	50	普通科	20	20	371	197	21	5.66	153	41.24	174	46.90
255	男	50	中学校	15	14	362	173	0	0.00	189	52.21	189	52.21
152	女	50	普通科	8	22	270	125	12	4.44	133	49.26	145	53.70
144	女	40	国際科	4	21	439	169	31	7.06	239	54.44	270	61.50
244	男	40	総合科	7	25	584	204	28	4.79	352	60.27	380	65.07
231	男	30	通信制	2	4	311	99	17	5.67	192	64.00	209	68.08
143	女	40	通信制	25	20	428	130	17	3.97	284	66.36	301	69.84
			平均			474	318	12.7	2.81	144	31.82	157	34.17

文中、文末、出現回数を問わずに、発話中のどこかに丁寧体を含む教師発話レコードの出現率は最小9.80%、最大69.84%、平均34.17%であった。ちなみに笹(2002)は『男・職』における職場の談話での、「です・ます」表現(でしよう・ましよう、ませんなどの文中・文末出現を含むもの)の比率を、全体で26.2%、会議の場面では32.7%と報告している。また東(2007)の調査によれば小泉元首相の所信表明演説における丁寧体文末文の割合は65%、安倍元首相は77%。「ぶらさがり」と呼ばれる歩きながらの短い取材に対する応答では小泉の「です・ます」体40%弱に対し安倍は80%強である由。これと比べてみると授業の談話の丁寧度は、平均的には一般的な職場の談話の丁寧度よりはやや高く、特に丁寧度の高いものでは首相の所信表明演説程度の丁寧度を持っていることがわかる。

丁寧度を定めるものとしては、教師の「個性」のほかにもどのような要素があるだろうか。30人の協力者のうち丁寧体の比率が20%未満の者が6人いるが、これはすべて男性であった。また男性の丁寧体の比率の平均30.41%に対し女性は39.41%と丁寧度は平均的には高い。ただし男性が常に女性より丁寧度が低いわけではなく、丁寧体の比率50%以上の丁寧度が高い者6人についての男女比は半々である。

中で特に丁寧度が高い者として、通信制の2例[143][231]が目される。この2人は表1で見るとおり、性別、年代、教科、対象となるクラスの生徒数、男女比などすべて異なるが、ともにきわめて丁寧度が高い発話をしている。通信制では生徒はスクーリングとして週に1度登校するのみ、定まったホームルームなどはなく、授業に関しても同一授業を複数回行い、生徒は都合の良い回に自由参加し、出席管理は受講票ですとのこと。生徒の年齢構成も学齢期の者のみではない。[143]の授業では60歳代の受講者もいるそうである。このような事情が教師と生徒の間に距離を生み出し、それが丁寧度の高い発話に影響していると見られよう。以下に例をあげる。

はい、えーと、第三回目の内容です。

ええと、まずね、遺伝のお話に入っていく前に、えーと、遺伝子とか、DNA

とか、染色体とか、似たような言葉がありますよね。

で、これをちょっとまとめておきたいと思います。[143・生物]

反対に丁寧度が低かった2人 [234] [221] について言えば、ともに男性であること、年代も比較的低いことのほかに、授業クラスが男子生徒のみであるということが共通している。若い男性教師が同性の生徒を前にして、改まった言い方よりは友人のような親しみを表す普通体を選択していると考えられる。以下のような話し方である。

これ、暗算しよう。これ。

もう消えちゃって、 $-4x-2y$ (マイナスよんエックスマイナスにワイ)。

二乗 (にじょう) は消えちゃうからね。自動的に。

で、こっちに+ (プラス) 四が出てくる。[234・数学]

ただし、この場合、相手が同性だからか、男性だからかという点は疑問が残るところで、女性教師においてももっとも丁寧度が低かった [153] [122] も年代、教科などについて [234] [221] と共通する点はないが、男子生徒がほとんどという教室での授業であることが注目される。すなわち、教師が男性か、女性かに関わらず、男子生徒に対する場合のほうが女子生徒に対するよりも丁寧度は下がるという可能性も考えられる。ちなみに [153] と同一人物である [154] [155] の、女子生徒が多く、1クラスの人数も多い授業では10%以上丁寧体の比率が高くなっている。ただし、[251] [253] のように男性教師が男子生徒のみに行っている授業でも丁寧体の比率が30%程度とほぼ平均に近い例もある。この2例はそれぞれ物理、日本史の授業を50代の男性教師が行っているもので、教師の年代、授業教科なども丁寧度を決定する要素となっている可能性がある。

教科に関しては、全協力者のうち [232] [234] [254] の3人が数学担当であるが、丁寧体の頻度はいずれも20%未満で、他教科に比べて丁寧度が低いと言えそうだ。数式の説明などを含む談話では「です」「ます」を用いず言い切るほうが明確であるということか。また、数学の場合は数式を板書しなが

ら説明するという授業形式が多いため、発話が板書を確認しながらモノローグ的に発せられており丁寧度が低いということも考えられる。

[242] の音楽教師も比較的丁寧度が低いが、これは合唱指導をしている授業であり、ピアノを弾き、かけ声をかけながら発声を促すというような場面では「です」「ます」などは出にくいのだと察せられる。

表2に見るとおり、これらの丁寧体の大部分は文末表現として現れている(文中・文末ともに現れているものは丁寧体発話として、表では文末丁寧体に加えた)。また、ここでいう文中丁寧体とは、発話中に「です」「ます」などのバリエーションを含みながら文末は普通体であるというもので、次のような例がある。

で、この度量衡の衡なんですけれども、えー、あ、衡なんじゃねえ、度量衡なんですけれども、うん、あの一、ラボアジェが非常に、あ、科学的にね、えー、これを、あの一、決めていく。[144・世界史]

このような発話の協力者ごとの出現率は最大7.06%、最小0%、平均2.74%であった。笹(2002)の計量によれば『男・職』のこのような発話の出現率は19.3%である。『男・職』の談話が複数の発話者の雑談や会議などから成り、相互の関係によって、いわば先の予測なく進行していくのに対して、授業はほとんど一人の教師の意図のみによってあらかじめ計画され進行していく。それゆえ、授業の談話には文中と文末の丁寧度に整合性のない文中丁寧体の出現が少ないのは当然だとも言える。ことに [255] についてはこのような文中丁寧体の発話は1例も見られず、文中と文末における丁寧度のねじれのまったくない端正とっていい発話をしていると見られる。これは [255] が中学校で、協力者の中ではもっとも年齢の低い生徒に対してのゆえに、生徒との間に一定の距離があること、また「言葉遣い」の端正さを含めて指導を行おうという意図が強いことなどによると考えられる。

3.2 文末の「ね」の出現について

「ね」が対人調節の機能を持つ終助詞であることについてはすでに多くの言

及がある。「ね」は、「です」「ます」の丁寧ではあるが断定的な語調や「だ」や体言言い切りなどの直接かつ断定的な語調を緩和し、相手に呼びかけ同意を引き出す。これは「ね」の、いわゆるポライトネス機能と言われる働きである。

表3では文末（発話レコードの最終部分）に現れた終助詞「ね」もしくは「ねえ」の出現頻度（A）を協力者ごとに、丁寧体が続くもの（B）、普通体が続くもの（C）と整理して示した。普通体が続くものには一語文の「ね」「ねえ」をも含めている。（D）は「ね」「ねえ」で終わる普通体発話の教師発話に対する割合である。丁寧体を用いず、終助詞「ね」でポライトネスを表示している発話といえる。さらにこれを丁寧体による丁寧度（E）と加え（F）とし、少ないものから並べた。このような操作によって各協力者のポライトネスの表し方が見えてくる。なお、以下に言及する事例については、淡色の網掛けをしている。

多くの話者は文末「ね」の使用によって、談話全体のポライトネス度を上げているが、中でも [254] [132] は普通体に「ね」をつけて用いることによって談話全体の丁寧感・親和感を大きく上げる話し方をしている。元来丁寧体出現率の少ない [234] [221] などにも、この傾向はややあり、これによって丁寧度は低いものの親和度の高い談話を行っている。

いっぽう、すでに丁寧体を多用している話者においてはむしろ丁寧体にさらに「ね」を付ける例が多く、普通体に「ね」を付けてポライトネスの補完をする例は比較的少ない。この傾向が特に顕著なのは [255] であり、[244] にもそれはあてはまる。[255] については文中丁寧体の出現もなかったことを考え合わせると、丁寧体「です」「ます」や、これらに「ね」を付けた丁寧で親和的な話し方をしているいっぽうで、丁寧体を用いない部分では断定的かつ非親和的な言い切りを用い、それらの差のはっきりした話し方をしているようだ。このような話し方を決定している要因については実際の発話例に照らしての検証・考察が必要かと考えられるが、それについては今後の課題の一つとしたい。

なお、「ね」の一般的な使用頻度としては宇佐美1997に『女・職』データがあるが、それによれば会議の談話で30.0%、雑談で18.1%であった。授業で

の「ね」の使用頻度は20.65%であるから雑談をやや超える程度ということになる。

表3. 文末「ね」の出現と発話のポライトネス度

協力者 コード	性	年 代	学科・ 課程	生徒 男	生徒 女	教師 発話	ね 文末	A ね文末/ 教師発話 (%)	B 丁寧体 +ね	C 普通体 +ね	D 普通体ね/ 教師発話%	E 丁寧体/ 教師発話 (%)	F 丁寧体+普通体 ね/教師発話%
242	男	40	普通科	16	8	711	39	5.49	5	34	4.78	12.24	16.98
234	男	30	普通科	44	0	439	41	9.34	3	38	8.66	9.80	18.46
221	男	20	国際科	2	0	540	99	18.33	6	93	17.22	10.56	27.82
232	男	30	工業科	5	3	473	75	15.86	11	64	13.53	16.28	29.83
153	女	50	工業科	13	1	577	88	15.25	17	71	12.31	20.62	32.91
243	男	40	工業科	4	19	412	86	20.87	16	70	16.99	17.48	34.49
122	女	20	工業科	28	0	305	36	11.80	8	28	9.18	25.90	35.08
121	女	20	定時制	4	5	535	61	11.40	31	30	5.61	30.28	35.91
141	女	40	総合科	7	13	806	143	17.74	74	69	8.56	27.42	35.96
261	男	50	普通科	22	20	715	74	10.35	16	58	8.11	28.67	36.81
241	男	40	国際科	5	30	466	58	12.45	12	46	9.87	28.97	38.87
233	男	30	国際科	0	15	681	117	17.18	59	58	8.52	31.42	39.92
131	女	30	総合科	14	26	426	38	8.92	22	16	3.76	37.79	41.56
251	男	50	普通科	17	0	510	132	25.88	66	66	12.94	29.02	41.94
254	男	50	定時制	7	2	370	120	32.43	4	116	31.35	11.08	42.45
155	女	50	国際科	5	30	323	81	25.08	43	38	11.76	32.82	44.56
133	女	30	国際科	5	32	289	43	14.88	22	21	7.27	37.72	44.97
222	男	20	総合科	6	12	634	136	21.45	22	114	17.98	27.44	45.38
253	男	50	工業科	31	0	531	125	23.54	47	78	14.69	32.58	47.29
151	女	50	国際科	5	28	394	80	20.30	37	43	10.91	38.83	49.71
154	女	50	国際科	5	30	620	145	23.39	60	85	13.71	36.13	49.81
132	女	30	国際科	1	23	317	92	29.02	25	67	21.14	29.97	51.14
142	女	40	国際科	1	18	395	51	12.91	28	23	5.82	46.58	52.42
255	男	50	中学校	15	14	362	64	17.68	61	3	0.83	52.21	53.03
152	女	50	普通科	8	22	270	92	34.07	71	21	7.78	53.70	61.48
252	男	50	普通科	20	20	371	142	38.27	86	56	15.09	46.90	61.99
144	女	40	国際科	4	21	439	101	23.01	88	13	2.96	61.50	64.46
244	男	40	総合科	7	25	584	260	44.52	246	14	2.40	65.07	67.50
231	男	30	通信制	2	4	300	73	24.33	60	13	4.18	68.08	72.26
143	女	40	通信制	25	20	428	148	34.58	118	30	7.01	69.84	76.81
						平均	95	20.65	45	49	10.50	34.50	45.06

4. まとめ

完成途上のデータベースから現段階で可能な計量によってわかる、教師の談話の丁寧度・親和度などについて概観した。ほとんどの学校で教師と生徒は日常ごく近い距離で暮らし、ほとんどの生徒は教師より年下であることなども考えあわせると、平均的にも一般職場での会議の談話を越える丁寧度を持ち、丁寧度の高いものに至っては政治家の所信表明演説にも匹敵する丁寧度を持つ授業の談話は、予想以上に丁寧なものと言える。丁寧度・親和度には、教師の個性のみならず生徒の数・性別などの状況、担当教科の性質などが影響しているようだが、これらを越えて教師が生徒との関係をいかなるものとしてとらえ、授業において何をどのように伝えようとするのかという意図・ストラテジーが反映されていると思われる。この意図と言語形式との関係を今後明らかにしていきたいと考えている。

また、同じようにストラテジーとして行われているはずの言語的要素、たとえば呼びかけの語、命令や指示のしかたなど、談話のさまざまな側面から授業の談話の特徴を探り、それらの特徴を決めてゆく授業内容と言語形式の関係を明らかにしていきたい。なお、データベースそのものについても整理、完成した段階では公開し、さらなる研究に供したいと考えている。

参考・引用資料

- 現代日本語研究会 (1997) 『女性のことば・職場編』 ひつじ書房
現代日本語研究会 (2002) 『男性のことば・職場編』 ひつじ書房
笹寿美子 (2002) 『『です／ます』表現の使われ方』 (『男・職』所収)
宇佐美まゆみ (1997) 『『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス』 (『女・職』所収)
東照二 (2007) 『言語学者が政治家を丸裸にする』 (文芸春秋)

(こばやし みえこ)